

第1章

金沢市の自然条件・社会条件

金沢市の防災対策について考えるに当たって前提となる、市の自然条件及び社会条件について概要を記す。

第1節 自然条件

1 地勢

金沢市は、北西は日本海に面し、南西から南東にかけて白山山系の奈良岳(1,644m)、大門山(1,571m)から医王山(939m)の山岳地帯となり、白山市（旧鶴来町、河内村）から富山県南砺市（旧上平村、旧福光町）、小矢部市に接している。

これから北に向かって北部加賀丘陵地となって傾斜し、丘陵地の先端から金沢平野が広がり、その中を犀川(34.5km)、浅野川(28.93km)、森下川(23.6km)などの河川が日本海や河北潟に流れ、河口には金沢港が形成されている。

市街地は、丘陵部から平野部にかけて展開しており、平野の西部で白山市（旧松任市）と野々市市に接し、東部から北部にかけて河北郡津幡町と内灘町に接している。

2 面積

金沢市の総面積は、468.81km²であり、うち都市計画区域は223.49km²(市街化区域 86.46km²、市街化調整区域 137.03km²)、林野面積は281.48km²である。東経136°33' ~136°49'、北緯36°20' ~36°40' の間にあって、東西の距離は23.3km、南北の距離は37.3kmであり、海岸線の長さは9.2kmである。

3 気候

日本海側気候として、年平均気温16.5°C、年間降水量2,780.0mm、年間降水日数(日降水量が1.0mm以上の日の合計)172日、年間雪日数34日、平均湿度73%、日照時間1,801.8時間であり（いずれも平年値）、冬の降雪をはじめ年間を通して降水量が比較的多く、日照時間が少ない。

4 地形・地質の概要

金沢市域は、地形的には北西部一帯の平野部と南東部一帯の台地・丘陵・山地部に大区分される。

平野部は、海岸線に沿った幅約7kmの範囲の大部分が標高10m未満であり、南西側は手取川扇状地から北東側の河北潟に至り、北西側は標高30m未満の低い砂丘を介して日本海に接している。

台地・丘陵・山地部のうち、平野部に近い標高ほぼ200mのところは台地・丘陵部で、その南東から南にかけては次第に標高が高くなる山地部が県境まで続き、その丘陵部の中で戸室山とキゴ山が孤立丘を形成している。

平野部には第四紀の沖積層が分布し、その厚さは南西側では10m前後であり、北東に向

かつて次第に厚くなり、河北潟付近では、50～60mに達し、粘土と砂と砂礫の互層で構成されている。

海岸部の砂丘は、均一な中粒砂で構成されており、河北潟干拓地から大野川沿いにかけての埋立地と金沢港口に隣接する埋立地は、人工改変地である。

台地・丘陵部は、第四紀の洪積層である卯辰山層（礫層・砂層・泥層）と大桑層（砂層主体）及び新第三紀中新世前期～後期の堆積岩（砂岩・泥岩・頁岩・礫岩・凝灰岩）で構成されている。戸室山は第四紀更新世中期の溶岩で構成されており、その周辺の台地地形部は戸室火山泥流堆積物によって谷部が埋積されて形成されたものである。河岸段丘部には、その上流に5～10mの厚さの段丘砂礫層が分布し、また、台地・丘陵部を開析して流れている河川沿いには粘土・砂・礫からなる沖積層が小分布している。

台地・丘陵部の南東から南に続く山地部に分布しているのは、新第三紀中新世前期の流紋岩質火碎岩と安山岩質溶岩・火碎岩がほとんどで、その中に岩脈及び堆積岩が小分布している。分布域は広くないが、古第三紀の堆積岩（楡原層）、流紋岩質火碎岩（太美山層群）、並びにジュラ紀以前の片麻岩類（飛騨变成岩類）も見られる。

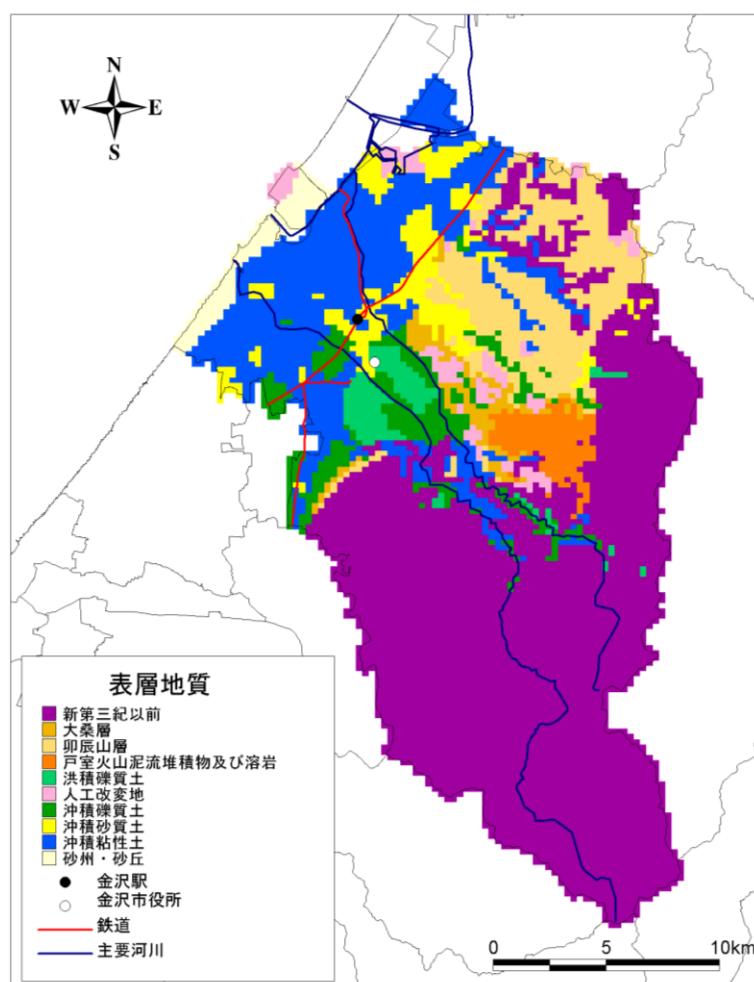


図1-1-1 表層地質図

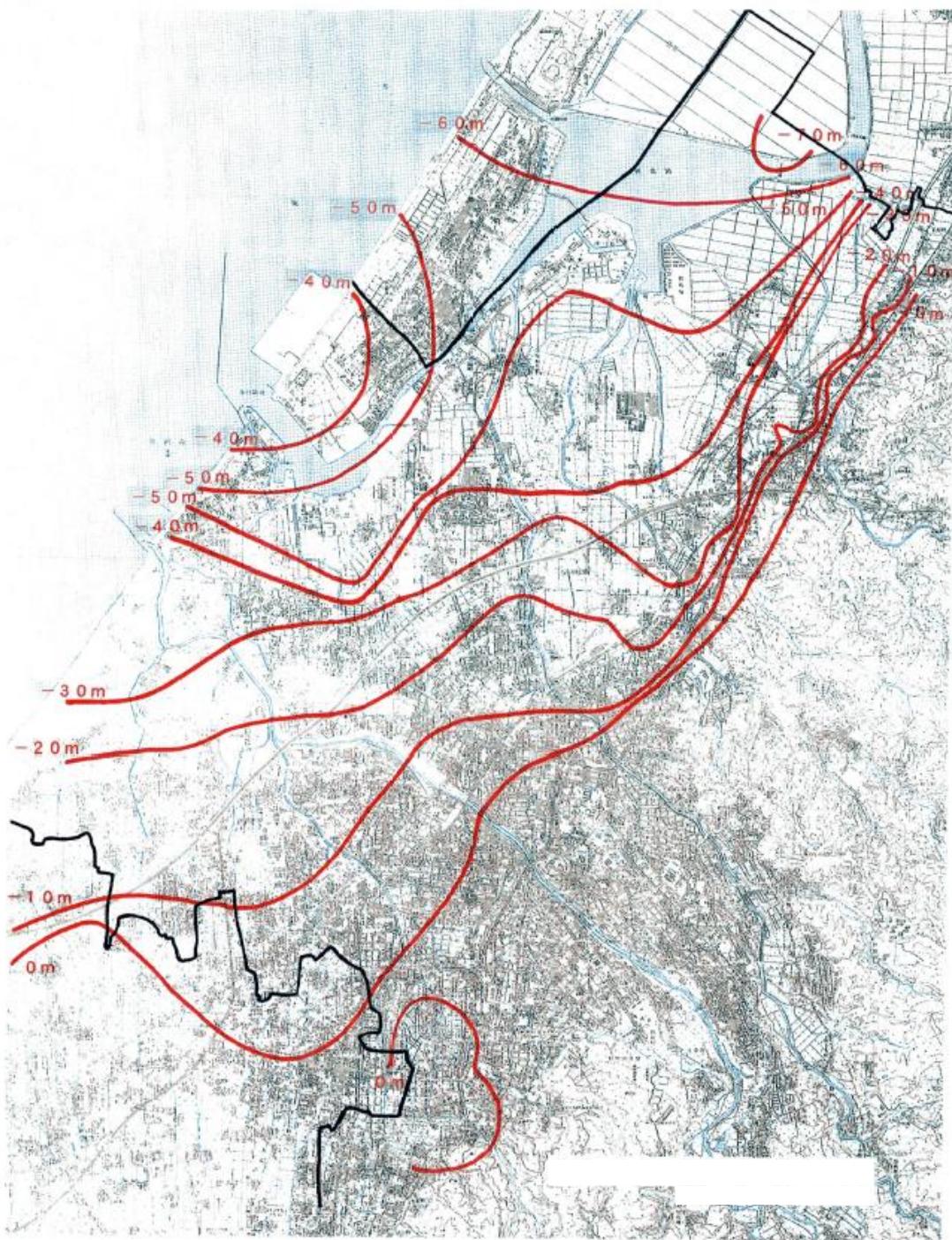


図 1-1-2 沖積層基底等標高線図

第2節 社会条件

1 人口

令和2年(2020年)国勢調査によれば、本市の人口は、463,254人、207,520世帯である。平成27年(2015年)国勢調査に比べ、人口は2,445人、0.53%の減少、世帯数で7,948世帯、3.98%の増加となった。近年の人口動態の推移を見ると、自然動態は減少傾向にある反面、社会動態は増加が続き、自然動態の減少を社会動態が補う状況となっている。

本市の高齢人口比率は、平成22年(2010年)の国勢調査では21.2%、平成27年(2015年)の国勢調査では25.0%と上昇していたが、令和2年(2020年)の国勢調査では26.8%と微増となっている。一方、14歳以下の年少人口及び15歳以上64歳以下の生産年齢人口は、平成27年(2015年)の国勢調査ではそれぞれ13.5%、61.6%で、いずれも減少傾向にあり、約4人に1人が65歳以上の高齢者となる超高齢社会を迎えており。

令和2年(2020年)の国勢調査では、世帯数は増加したものの、1世帯当たりの人員は2.23人と過去最低となっており、今後も核家族化や少子化、高齢者の単身世帯の増加により、世帯数は増加し、1世帯当たりの人員は減少するものと想定される。

2 土地利用の変遷

本市の土地利用は、森林が約6割を占め、市街化区域は18.1%（平成17年現在）にとどまるものの、住宅地域を中心に増加傾向にある。

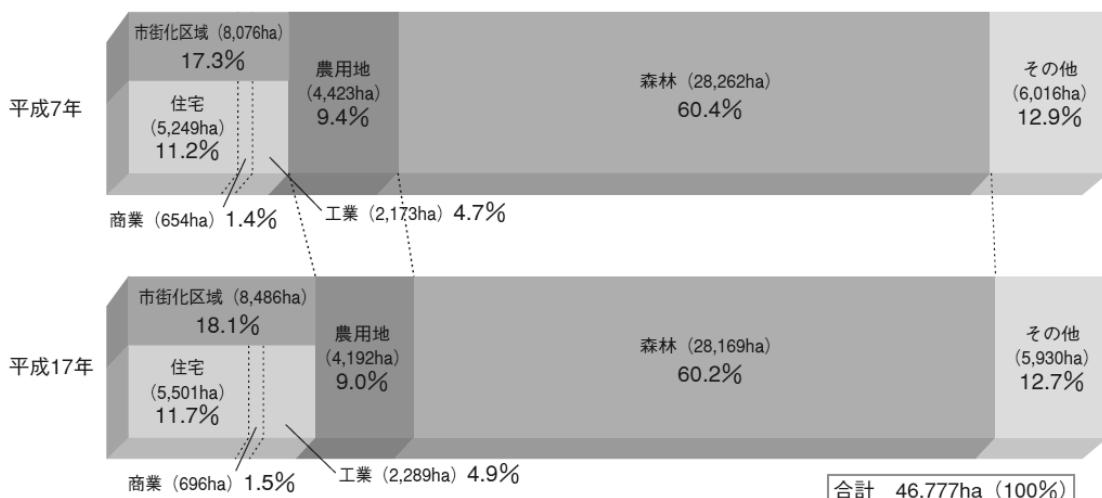


図1-2-1 土地利用の状況

出典：金沢世界都市構想第二次基本計画

住宅地域を中心に土地利用の変遷を見ると、以下のようになる。

(1) 明治後期(図1-2-2)

明治後期の金沢周辺は、金沢城周辺に大きな集落を形成している。また、金石港及び大野港周辺には比較的大きな集落が存在している。

平野部は大部分が水田であり、小さな集落が点在している。

交通は、国鉄(現JR)の北陸本線が現在とほぼ変わらない状態で通っている。

道路は、旧北陸道が市街地を通っており、市街地と金石とを結ぶ道路も整備されている。

(2) 昭和中期(図1-2-3)

宅地について大きな変化はないが、東金沢駅の開業に伴い、その周辺に宅地が形成されている。また、長田周辺にも宅地が形成されている。

北陸鉄道の浅野川線・石川線・金石線が開通している。

(3) 昭和後期(図1-2-4)

宅地が発達し、旧市街地から森本までが宅地でつながっている。また、水田部分にあった各集落もそれぞれ大きくなっている。

金沢港の開港により、大野町の形状が変化している。また、河北潟の干拓が開始されている。

北陸自動車道が金沢西インターまで開通している。

(4) 現在(図1-2-5)

平野部のほとんどが宅地でつながっている。また、山地・丘陵地にある谷底平野まで宅地でつながっている。

金沢新港により、五郎島町の集落が移動している。また、大野川沿いも宅地・工場として整備されている。

北陸新幹線が東京ー金沢間で開業している。

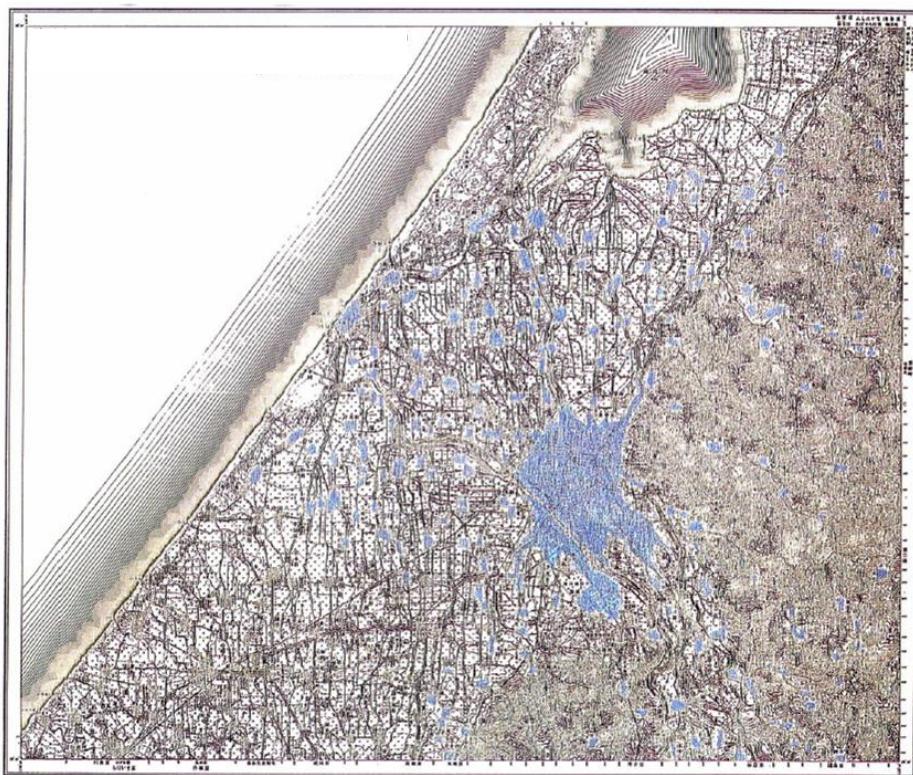


図1－2－2 明治後期の土地利用

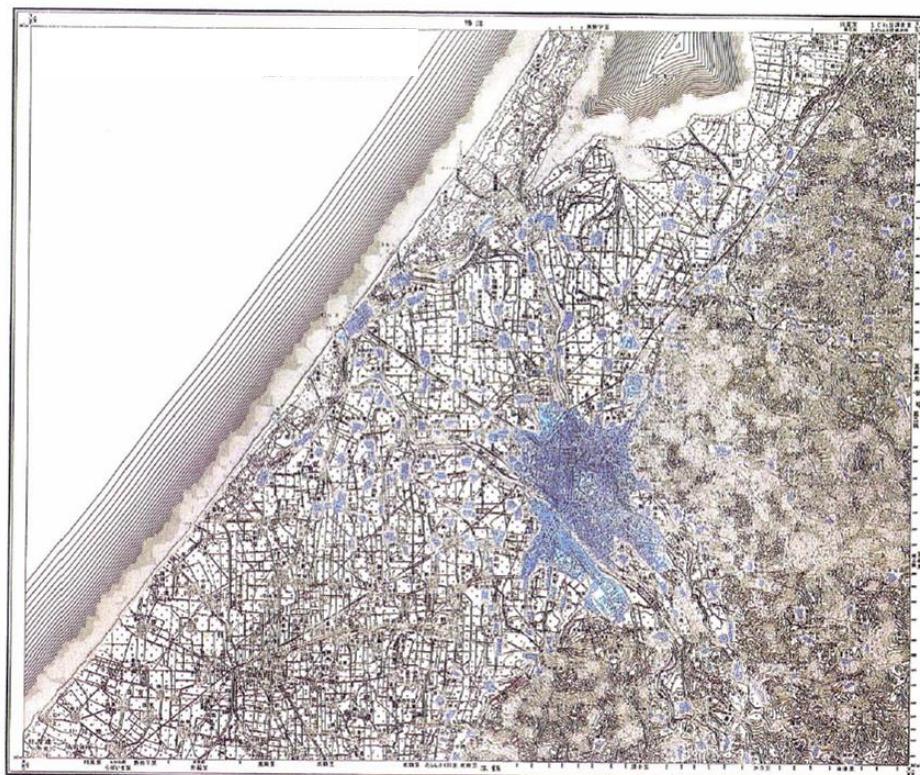


図1－2－3 昭和中期の土地利用

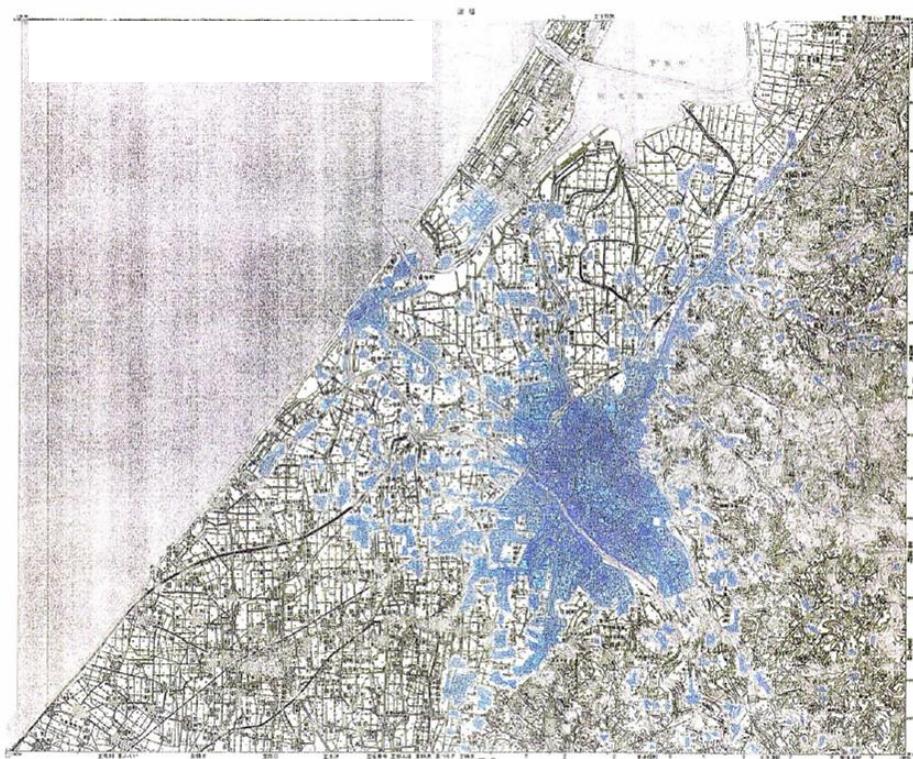


図1－2－4 昭和後期の土地利用

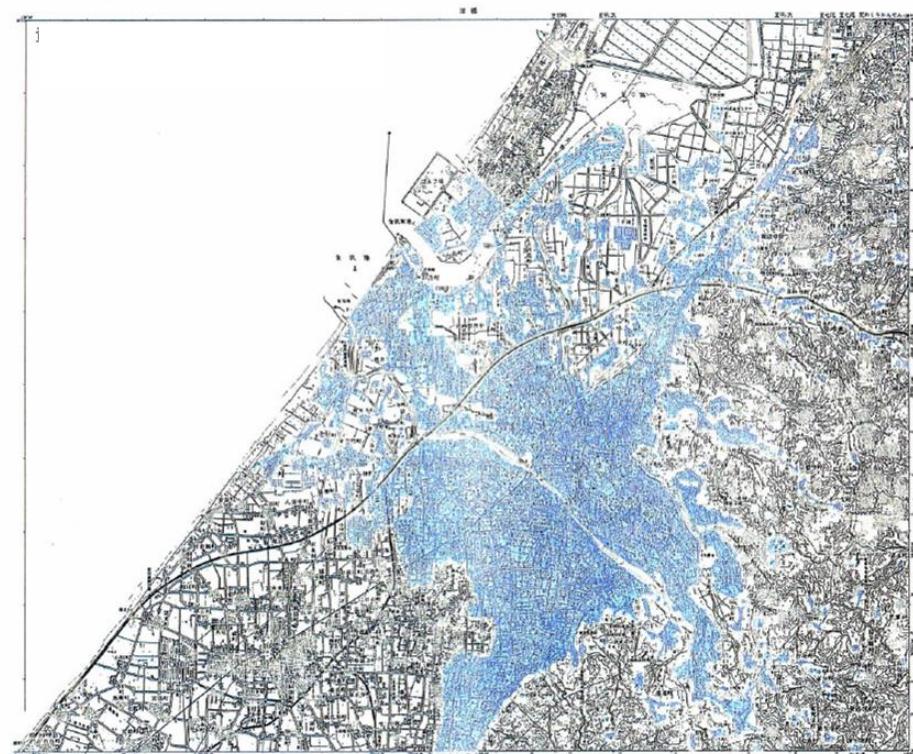


図1－2－5 現在の土地利用